

山中逢雪(他三首) : 文苑

著者	杉山, 富槌
雑誌名	龍南會雜誌
巻	2 8
ページ	5 6 - 5 7
発行年	1894-06-27
URL	http://hdl.handle.net/2298/4422

舟到馬關

駛潮如箭幾灣々白石洋連赤馬關到此歸
心先一笑寸青穿眼鎮西山
丹釀一樽遠挈提樹來嘉粟到吾臍醉中唱
出賴翁句隔岸青山是鎮西

夜渡玄海抵博多

桅檣影凍海潮寒峨艦凌風七十灘波打鰲
身漂二嶋月摩鯨背落三韓撚鬚聊且供長
嘯燥髮初逢此壯觀投錨一聲天未白霸家
臺下賀安瀾

入坑後

曾識美遊輪惡歸故林况又夢依々唯嗤行
色沈淪甚仍舊青山映布衣
哭弟未休還哭母悲哀三歲夢荒涼那堪今
日提携少獨護阿爺歸故鄉

歲暮

助教授園哲雄

四九光陰今欲空蹉跎未奏馭戎功窮來始
悟男兒業多在畢生坎懷中

歲旦二首

黎民豈管仰堯天拜賀明治廿七年壽頌成
時先試筆紙中無處不祥煙
日往月來歲一周東山微白瑞煙稠至尊親
拜四方處紅旭照臨六大洲

山中逢雪

硯友會員 杉山 富樫

寒風颯々凍雲昏飛雪紛紛路僅存前嶺後
峯滿皜皜溪間失却數家村

孫堂先生曰非生於雪國者不能知此詩之妙

幽居初夏

江上林莊靜竹孫過柴扉雨餘新綠滴殘蝶
送春歸

又曰惜春之意在言外

初夏新晴

細雨始收天地鮮江頭橋畔樹相連幽居不
恨無人問萬綠叢中聽杜鵑

又曰初夏之景曲盡於結句七字中

江津湖上監督親陸會席賦上似全
學諸子

澄江十里水悠悠。一片輕舟漁唱幽。綠樹蒼蒼連荻落。白鷗點點掠芦洲。西山烟鎖落霞遠。天外雲晴夕陽流。師弟同斟垂柳畔。紅塵洗盡倚高樓。

さつきの廿六日、たのか學校の人々、五松庵といふ家につとひしけり、その日、又か友ある永井の君も、同玄くそのむしろにつらかりて、酒のみかはしけるに、うのあくる朝、おのれいさゝか、尋ぬへきことありて、訪ひけるよ、今しがた、俄にミまかり給ひぬとて、妻ある人の泣きしつみける、こはろもいかに、と問へど、たゞ絶えもいらんはかりにさむなきける、人の死ぬる、誰にか悲しうらざらめやは、しかはあれど、をみあわらはの十、一二歳あるを、はしめて、三人のをさ

あ子をわきて、この世をはやうせる、その悲しさ、たとしへあらんや、さるほどに、例のわざともせんとて、あまたしく、人のものするに、妻ある人の、父うへの顔みるも、なふ限あり、よく見てあどて、をさあ子の手をひきつゝ、なきからにとりすがりけるも、をさあ子のあどなき、あにらえらん、只ほゝゑみて、人のうちよるをよるこび顔ある、あはれや、終のわかれども、しらぬことよ、どまたあきふせる、目もあてられず、涙とともになにかみいつるまゝをかきて、靈前に手向ける、

宇 衛

たゞく、にみのりえものをちゝの木のかれゆく末をけふいかにせん、さつきやみものゝあやめもわかぬまで、うきくらしけりわかれつらしも